

2022年1月1日

説教「主が神であることを知れ」

詩篇 46 篇 1～11 節

2022年の元旦礼拝です。雄大で高らかな信仰を伝える詩篇 46 篇から教えられて行きましょう。時代は紀元前 700～800 年ぐらいでしょうか。表題には「指揮者のために。コラ子たちによる。アラモテにあわせて。歌」とありますが、コラの子たちは礼拝賛美に用いられました。アラモテとは女性合唱。この詩篇が新年礼拝に用いられることもあったようです。

1. 神への信頼 (1～3 節)

- ①神は避け所 (1) 「神はわれらの避け所。また力。苦しむとき、そこにある助け。」神とは創造主。しかし、人の歩みには嵐があり、日照りもあります。詩人のように、国の危機や問題に遭遇することもあるでしょう。また個人的な重い悩み事にぶつかることもあるでしょう。そのような時に、人は人を頼りにしやすいのです。しかし、この詩人は「神はわれらの避け所」と告白します。様々な苦しみの中にあっても、主なる神は助けを与えてくださるのです。人は最終的な頼りとはならないのです。神こそが避け所であり、助けだと告白されているのです。もしかすると、詩人もこれまでには、人間的に格闘をした結果、何度も挫折したのかもしれない。しかし、今は主なる神が避け所と確信しているのです。
- ②山々が海の真中に (2) 「それゆえ、われらも恐れぬ。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。」詩人は「主が避け所であり助け」であることを信じたうえで、「恐れぬ」と述べます。それも半端ではありません。たとえ地の様が変わって、山々が海に移ったとしても恐れぬというのです。聖書の世界でも、山は動かないものであると覚えられていました。「動かざること山の如し」は信玄の旗印でした。しかし、富士山が太平洋に移動したとしても、恐れぬという覚悟をしています。恐れを抱いている心中には、失いたくないという強い思いがあり、失ったらどうしようかという思いから恐れが生み出されるのです。詩人は主を徹底して見上げているので、恐れが侵入できないのです。
- ③その水が騒ぎ (3) 「たとい、その水が騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても」セラ。詩人はさらに、その覚悟を深めます。水が騒ぎ、あわだち、水かさが増すとは、主なる神の創造された秩序が乱れることです。そのような時にも、詩人は主が避け所だと告白しているのです。セラとは詩の一区切りを表します。

2. 神は夜明け前に (4~7 節)

① 都はゆるがない (4~5) 「川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい。神の都を喜ばせる。神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。」印象的な一節です。「川がある」。神の都エルサレムには川はないのですが、シロアムへの水路から大河を想像したのかもしれませんが。そこにある人々の営みの真中に主はいてくださるので、不動の安定が与えられるというのです。そして、神が疲れた者や困った者の助けをされるのは夜明け前だとあります。人が動く前に主はそれをなしてくださるのです。

② 御声が発せられると (6) 「国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。神が御声を発せられると、地は溶けた。」一方、国々は狂うようにして騒ぎ立てるのです。そして、各地の王国は安定を失うのです。しかし、彼らは神が御言葉を雷鳴のように発せられると、溶けるようにして、神の言葉に震えて服従することになるのです。

③ 万軍の主 (7) 「万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりである。」セラ 天地の支配者である神について、旧約聖書では「万軍の主」とよく呼ばれます。その主が、詩人を含めた神の民とともにおられるという確信が告白されます。私たちのためにお生まれくださった、救い主イエス・キリストはイザヤ書 7:14 において「その名はインマヌエルと呼ばれる」と預言されました。その意味は「神がともにおられる」でした。詩人はまたヤコブ (イスラエル) の神は、神の民にとっては砦であり守り主であると述べます。万軍の主がともにいてくださるのですから心強いのです。

3. わたしこそ神である (8~11 節)

① 主のみわざ (8~9) 「来て、主のみわざを見よ。主は地に荒廃をもたらされた。主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへしおり、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。」何らかの歴史上の戦争が背景にあるかもしれませんが。その結果、地は荒廃を招いていました。人が驚くような破壊は人間の罪の結果、主によってもたらされたものでした。しかし、主は地の果てにまで広がる戦いをやめさせ、弓や槍を使えなくされ、馬を動力とする戦車を火で焼かれたのです。

② やめよ (10) 「『やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。』」戦いが横行するなかで、主は言われるのです。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」と。「やめよ」は「放棄すること」で、新共同訳聖書では「力を捨てよ」と訳されています。要するに、神を忘れ、人間の力に基づいて事をなそうとする試みを捨て、主なる神こそが主権者であることを知りなさいと促されているのです。本来、創造主

なる方は、イスラエルだけではなく、国々においてあがめられ、全地においてあがめられる方なのだと教えられます。

③ われらと共に (11) 「万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりである。」7 節と同じフレーズです。天地万物の全権をもっておられる主は、神の民とともにいてくださるのです。そして、万軍の主、ヤコブの神は砦となって、外敵から彼らを守ってくださる方なのです。

《結論》

2022 年の元旦礼拝。詩篇 46 篇を学んでいます。

今朝はこの詩篇から一点に絞って学んでいきたいと思えます。この詩の作者は、神が避け所であり、力であることを確信しています。そして、山が海に移るほどのことがあっても、主なる神に信頼するがゆえに恐れないと告白しています。また、万軍の主は神の民とともにあっていつも御手を伸ばしてくださるという確信が彼にはありました。

とはいえ、彼のおかれている国、国際間、目の前の社会と生活のなかにあっては、厳しい現実がありました。他国との争い、荒廃をもたらす事態、目の前の人々の争いごとや小競り合いなどが、目につります。国も弱れば、人の心も揺らぐのです。

そんななかで、圧倒的な神のご主権に心を向けさせられた詩人は導かれたのです。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」この一節は、口語訳では「静まって、わたしこそ神であることを知れ。」でした。国際的紛争のことまでも視野が広がっているのに、「静まって・・・」では、事柄を個人的な範囲に狭めてしまうという考える向きがあるかもしれませんが、とても良い訳であると思うのです。この節の意味は、人間の力に頼ることを捨てて、主が神であることを知るために、神に立ち返れということです。「やめよ」というのは、今のまま、神から目を離して、自己中心で、人間中心の生き方をすることをやめて、人生の舵をきって、神中心の生き方に入りなさいということでしょう。そして、主が神であることを知識においても、体験においても知っていくことが求められているのです。自らの力に頼る生き方を捨てると心得て、静まって、主が神であることを知っていくということによって重要であると思われまます。それは、人間の力や能力に頼る道ではなく、主権者である神の御力に頼るということを意味します。

静まって、主が神であることを知る事は、人と人という少数単位はもちろんのこと、ちょっとした群れ、大きな群れ、地域や国といった大きさに至るまでの基本です。

あなたが今、新しい年を始めるにあたり、具体的な仕事や学びや生活の具体的な目標はあるでしょう。しかし、その前提には、主が神

であることを知る方向を目指し、ともにいてくださる主を仰ぐことが大切なのです。もっともっと、主が神であることを求めていきましょう。

私たちの教会にも同じことが言えます。群れ全体で、神が避け所であると認めて、主の前に共に静まり、主をさらに深く知っていくことが、群れの霊的に成長へと進んでいく道なのです。ただ私たちは、神の前に静まって霊的生活をしていると思っても、いつの間にか人間の力を頼る方向に逆戻りしやすいので、繰り返し主の前に静まって主を知ることが、ともに求めていきましょう。讃美歌 267 番は宗教改革者マルチン・ルターがこの詩篇に導かれて作詞作曲したものです。歌っていきましょう。今年も主の恵みが教会と連なる者たちの上に、豊かにありますように。